本市に残る文化財などが日本遺産に認定されていることを知っていますか。日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものです。

本市では、2019年（令和元年）に認定された、「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群「麓」を歩く～」の構成文化財に「入来麓」、「里麓」、「手打麓」などが含まれています。

今回は、構成文化財となっている各麓の特徴や魅力を深ボリします。

麓とは？

江戸時代の薩摩藩では、鹿児島城の城下に全ての武士を住まわせることができないため、県内各地の山城の周辺に「麓」と呼ばれる武士が住む町をつくり、今も多くの場所に残っています。

麓は、石垣、生垣で屋敷割りを行った武士の家が並んでいて、さまざまな工夫が凝らされた造りになっています。

現在、県内で日本遺産として登録されて残る麓の数は、12カ所。本市は、その中で最も多い3カ所が登録されています。

入来麓

防御性の高い、川と山に囲まれた

▲Google マップ（入来町浦之名）

里麓

海に面し、海上交通の監視を行った

▲Google マップ（里町里）

手打麓

約700mにおよぶ手打湾に沿った

▲Google マップ（下甑町手打）

入来麓

川と山に囲まれた自然の地形をうまく利用した武家集落。2003年（平成15年）12月に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。

入来麓の石垣は、川の石を使用しています。上下に大きい玉石を置き、真ん中に小さい石をはさんでいます。1つの石を中心に、6～7つの石で囲んでいるのが特徴です。生垣は、石垣を傷めないよう根が垂直に伸びる茶の木などを使用しています。

●清色城跡の堀切

築城からおよそ600年以上の歴史を持つ、人の手で掘られたシラス土壌の堀切。高さは約30m。人、1人分しか通れないため、攻めてくる敵を待ち構えて戦っていたといわれています。堀切を登った先から見える景色は絶景です。

現在、入来小学校がある場所は、入来の殿様がいたといわれています。

入来小学校から麓の方を見ると、一番右側の高い山を枕に、西郷さんが寝ているように見えることから、「寝西郷」と呼ばれているんだって！

里麓

里麓は海に面しており、海路の往来を監視するという役割を担っていました。海辺の丸い玉石を使った石垣が特徴的です。

里港から徒歩5分。里みなと公園付近から石垣に沿って歩道に色が付けられています。

里麓の石垣は、主に台風や偏西風などから家を守るために作られました。

全体的に丸石の石垣が特徴的ですが、強度を高めるため、端には角張った大きな石が見られます。生垣は、庭木に実用的な果物の木も多かったようですが、武道で使う木剣として利用できる、硬いイスノキなどが多く植えられています。

●亀城（かめじょう）跡

現在の里小学校の裏にある「亀城跡」。山が亀の形に見えることから名付けられたといわれています。鎌倉時代、地頭の小川（おがわ）氏の居城とされていました。

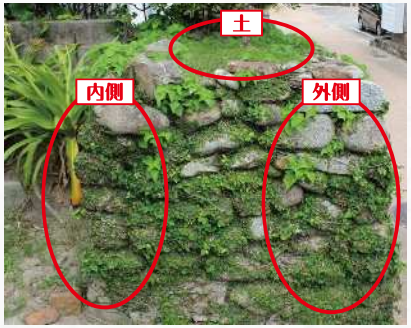
●石敢當（せっかんとう）

突き当たりの家の石垣には魔よけの意味を込めて、石敢當と呼ばれる石碑を置いています。沖縄や鹿児島を中心に残る石碑です。甑島でも見ることができます。

手打麓

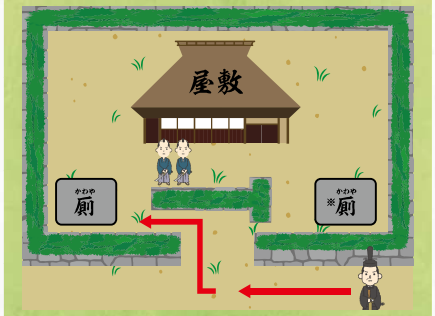
薩摩藩は、江戸時代を通して、浄土真宗（一向宗）を禁教としました。手打麓の石垣は、信仰していることを役人たちに気付かれないよう工夫を凝らして作られたといわれています。

山から採ってきた石を積み上げた石垣が特徴です。外側と内側から積み上げ、土を詰めて生垣を植えている2層構造になっています。



●津口（つぐち）番所（ばんしょ）跡

異国船の取り締まりのために置かれていました。近くの観音（かんのん）山を見張り山とし、取り締まりは番所の中でも特に厳しかったといわれています。



武家住宅の造りは、敵などの侵入を防ぐため、入り口には石垣が盾のように置かれており、直接入ってこれないような構造になっています。また、家の中から外の様子は見ることができますが、外から中の様子を見ることはできません。

手打麓には、通行人同士が話している内容を盗み聞きするため、門口の道路沿いの左右どちらかに厠が作られていたんだって！

※厠とは、家の外側に設けた現代のトイレのこと。